

【報告】

平成28年度情報リテラシー教育活動報告：ゲーミフィケーションやアクティブ・ラーニングを取り入れた能動的ガイダンスへの転換と、情報リテラシー教育活動のリデザイン

匂坂 佳代子

(学術情報課レファレンス係)

一橋大学学術・図書部

1. はじめに

一橋大学附属図書館（以下、「附属図書館」）では、平成28年度の情報リテラシー教育活動として、2つの目標を掲げた。第一に、従来実施してきた講師による講義受講型のガイダンスから、学生の能動的学修を促すため、ゲーミフィケーションやアクティブ・ラーニングを取り入れたガイダンスへの転換を図ることである。第二に、新入生を対象とした授業において教員と連携を図り、平成29年度以降に附属図書館のガイダンスをより広汎に実施できるよう、情報リテラシー教育活動をリデザインすることである。

上記の2つの目標を掲げた背景としては、まず、現在の大学教育では講義を受講することに重きが置かれる受動的学修から物事を主体的に捉えられる能動的学修への質的転換が必要であるとする「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」¹が平成25年に示され、国の政策として能動的学修への転換が掲げられたことが挙げられる。それと同時に、学内的な背景として、平成29年度に一橋大学（以下、「本学」）において実施される新学季制がある。

平成29年度に開始する本学の新学季制は、平成28年度まで1コマ90分であった2学期制から、平成29年度は1コマ105分の4学期制とすることにより、本学の重点課題²として掲げるグローバル化により積極的に対応することを目的とするものである。平成29年度の一日の授業は、平成28年度よりも開始時間が早まり、終了時間が遅くなる予定である。この新学季制の環境においては、平成29年度に学生が自由に学修時間として確保できる時間数は、平成28年度に比べて相対的に減少すると思われる。附属図書館が平成28年度まで実施してきた、自由参加型のガイダンスでは、平成29年度においては参加したくても参加できない学生が多く現れると思われるため、ガイダンスの内容やスケジュールを検討する必要がある。

大学図書館全体を取り巻く国の政策が能動的学修を進めるよう転換されたことと、本学におけるカリキュラム改正による学生の学修環境の変化という2つの要因に対応するため、平成28年度の情報リテラシー教育活動では、より学生のニーズに沿ったガイダンスへ内容を転換することを趣旨として、活動を行った。

本報告では、まず、ゲーミフィケーションやアクティブ・ラーニングを取り入れたガイダンスの事例として、平成28年度に新規に実施した企画である図書館脱出ゲームとレポート・

ワークショップを報告する。その後に、平成29年度以降の学部初年度における授業での図書館ガイダンス実施への取り組みについて報告する。

2. ゲーミフィケーションやアクティブ・ラーニングを取り入れたガイダンスの事例

2.1. 図書館脱出ゲーム

近年、大学図書館を会場として図書館脱出ゲームを実施する館が増えている。早稲田大学中央図書館では、図書館ボランティア団体の学生と協働し、図書館脱出ゲームを開催した³。また、常磐大学では、ゲームシステムを様々な分野へ応用することを目的とした研究会による、新任教員研修会のゲーム化を行ったとの報告がある⁴。他にも、立命館大学平井嘉一郎記念図書館での実施例⁵や、公共図書館での実施例⁶など、数多く報告されている。ゲーミフィケーションを取り入れることにより、図書館職員の説明を聞くだけだった受動的なガイダンスから、ゲームを解くことにより楽しみながら図書館の使い方を学ぶ能動的なガイダンスへの転換という趣旨で実施する館が多く、中には学生協働という文脈に位置づけている館もある。

附属図書館では、従来、主に学部・修士の新入生を対象とした図書館ツアーを4月に集中的に実施してきた。平成26年度には4月に15回実施し、205名の参加実績があった。平成27年度は、平成26年度の実績から、新入生にニーズがあるものと判断し、引き続き1回30分の図書館ツアーを6日間で13回実施したのだが、平成27年度の参加人数は100名に留まり、平成26年度に比べて約半減という結果となった。様々な要因は考えられるものの、大きな原因としては、附属図書館入口付近の工事が行われていたことと、学生の年々の多忙化が推察される。特に新入生は、4月当初は授業の履修登録や大学の手続に時間を割かれ、図書館ツアー自体気づいていないか、知っていても1日2回という決まった時間には参加するのが難しいのではないかと思われた。

そこで、平成28年度は、学部新入生向けの図書館ツアーに替えて、図書館脱出ゲームを新規に実施することとした。図書館脱出ゲームのメリットは、まず、学生の自由な時間に参加できることと、ゲームの途中でも開催期間中であればまた後日再開できるといった、学生が参加しやすい形式であることである。そして、クイズを楽しむとともに、1問解ければ次の問題へ進めるという、クイズをクリアすることによる達成感も味わえるため、学生がより能動的に館内の様々な場所を巡ることとなると考えた。本学の附属図書館は、新入生が普段は行かない奥まったスペースにも居心地の良い場所があったり貴重な資料があったりと、奥行きのある館であるため、できるだけ館を隅々まで巡ることで、学生自身に様々な発見をしてもらいたいとも考えた。

なお、平成29年4月に、平成28年度に実施した脱出ゲームをリニューアルして再演する予定であるため、内容の詳細は本稿では差し控え、概略を記載することとする。興味のある方は、平成29年4月に実施する図書館脱出ゲームに是非参加されたい。

2.1.1. 実施に向けてのスケジュールと担当者

図書館脱出ゲーム実施に当たっては、以下のスケジュールで進行した。

- 平成 27 年 1 月 企画立案
- 2 月 クイズ作成、ストーリー作成
- 3 月 クイズパネル作成、「脱出のしおり」作成、解答パネル作成
- 4 月 図書館脱出ゲーム実施
- 5 月 賞品抽選、当選者受渡、解答パネル掲示

実施の主体は情報リテラシー教育ワーキング・グループだった。クイズ、ストーリー、クイズパネルの作成は、情報リテラシー教育ワーキング・グループ内で担当者を決めて分担し、必要に応じて三者で協議しながら進めた。

2.1.2. 図書館脱出ゲームの要素

図書館脱出ゲームは、クイズとストーリーという2つの要素で構成される。

クイズはもちろん、図書館脱出ゲームの幹となるため重要な要素であるが、単なるクイズラリーと一線を画する要素としてクイズ同様に重要な要素であったのが、ストーリーである。参加者が附属図書館に関するクイズを掲載したパネルを辿る過程において、ただクイズに正解すると次のパネルの設置場所が分かるのではなく、パネルに合わせてストーリーも次々に展開することで、附属図書館という現実世界の中で架空の世界が重なり合うという体験が得られ、その架空世界からの脱出を目指す、という設定のイベントとなった。

ストーリーは、学部新生の「僕」が、附属図書館へ来館した時に、ふとしたことで架空の世界へ迷い込み、そこで附属図書館の入口にある石像「ガーゴイル」と会話したり励まされたりしながら、クイズを辿っていくというものである。ストーリーはクイズに対する直接のヒントとなる訳ではないが、クイズと同期して進むため、脱出ゲーム全体に広がりや厚み生まれ、脱出ゲームを企画する段階において意図した「楽しみながらクイズをクリアし、附属図書館の奥行きを感じてもらおう」という趣旨を達成するための、大きな要素となった。ストーリーの開始部分は、「脱出のしおり」に掲載し、脱出ゲームの開始に当たって参加者に世界観を伝えるツールとして使用した。

ストーリーは計6回分を作成し、「脱出のしおり」とクイズパネルに掲載した他、エンディングとして、最終解答を URL にはめ込んでアクセスする隠しページを Web 上に作成した。隠しページは、3パターンあり、まず、正解するとアクセスできる「脱出に成功したバージョン」、そして、引っかけ問題に引っかかった「惜しかったバージョン」、最後に正解できなかったもしくは諦めた場合にアクセスできる「残念バージョン」である。

2.1.3. 図書館脱出ゲームの流れ

脱出ゲームは、参加者の視点からは以下の流れで進めるようクイズを作成し、パネル等を設置した。

- ① 「脱出のしおり」を附属図書館1階ヘルプデスク前から入手する。「脱出のしおり」には、(1)ストーリー設定、注意事項(2)小問10問(3)最終解答(脱出のための合言葉)欄(4)アンケート、個人情報記入欄、プレゼント応募説明 が記載されている。
- ② 「脱出のしおり」に掲載している小問10問を解き、大問1問目のパネル設置場所の解答を得る。
- ③ 大問1問目のパネルに掲載されているクイズを解き、大問2問目のパネル設置場所の解答を得る。(以下、大問5問目まで同じ)
- ④ 最終解答及びプレゼント抽選のための必要事項を「脱出のしおり」に記入し、ヘルプデスクに設置した応募箱に投函する。
- ⑤ 5月中旬にプレゼントの抽選結果発表。当選者には附属図書館からメールで連絡がある。
- ⑥ 抽選結果発表後、6月初旬まで解答パネルが設置されるため、途中で諦めた者も答え合わせできる。

大問1問目～5問目のパネルについては、館内をできるだけ満遍なく周るという目的から、館内各所に散らして設置した。また、パネルの周辺に同時に数人集まることも想定し、利用者の動線を避けた。

2.1.4. 実施の結果

4月1日～28日まで実施した結果、213名参加し、うち27名脱出に成功という結果となった。参加者数は、「脱出のしおり」の配布部数をカウントした。また、脱出者数は、クイズの最終解答の正解者数をカウントした。なお、開催期間中は、順次、参加者数と脱出成功者数をカウントし、ヘルプデスク前に設置したボードに人数を掲示することにより、図書館脱出ゲームの動きを見せた。

開催期間中は、一人で参加する学生もいたが、数人のグループで相談しながら参加する学生も多かった。特に4月という時期において、友人作りも兼ねて参加しているらしいグループも見受けられたことが印象的だった。

5月2日にパネル等を撤去し、応募箱に入れられた、クイズの最終解答及びアンケート用紙を集計した。最終解答の正解者の中から抽選を行い、賞品の当選者を決定し、当選者にメールで連絡した。なお、賞品は、A賞：ブックエンド1個、B賞：手ぬぐいブックカバー3個、C賞：猫のしおり15個 である。賞品は、ヘルプデスクで担当者から当選者に受け渡した。



ヘルプデスク前に設置した「脱出のしおり」

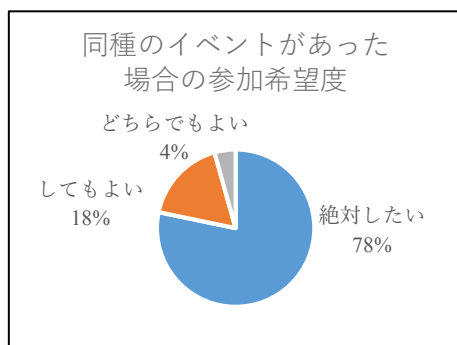
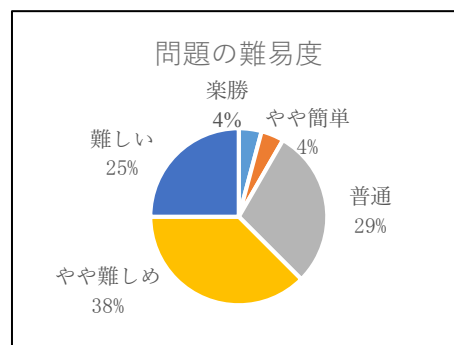
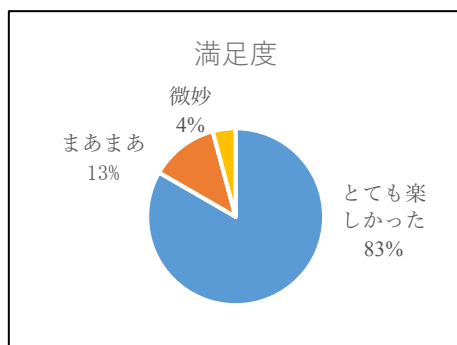


参加学生のグループ



賞品受け渡し

【アンケート結果】



上記からは、概ね好評であったことが伺える。ただし、アンケートを回収できたのが、最終問題までクリアできた学生のみであり、そこまで行きつかなかった大半の学生の意見は反映されていない点には留意する必要がある。

今回、図書館脱出ゲームを初めて実施してみた結果として、クイズやストーリーを一から作成したため、準備にそれなりに労力と時間がかかり、特にクイズを楽しませる仕掛けを作るのに工夫が必要となるという、運営上の経験が得られた。しかし、準備が必要となる反面、開始後はほとんど労力を要さないため、特にサービス部門が一番多忙となる4月に実施時期を合わせれば、同時期に職員による図書館ツアーを実施するよりも効率的であり、かつ学

生も楽しみながら参加できるため効果が大いと思われた。図書館脱出ゲームは、学生のニーズに即したガイダンスという趣旨に加えて、繁忙期のガイダンスの効率化という側面もあるため、ガイダンスの1コンテンツとして組み入れていけるよう、今後の運用方法を検討したい。

2.2. レポート・ワークショップ

主に学部1~2年生を対象とし、レポートの書き方について基礎的なガイダンスを実施することは、他大学図書館の事例⁷に事欠かない。本学でも、研究開発室教員が講師となって実施する講義形式のガイダンスを、平成27年度まで実施していた。しかし、特に平成27年度は参加人数が伸び悩んだことと、平成29年度のカリキュラム改正を見据え学生の自由時間が減少するであろうことを考慮し、平成28年度の企画を検討する段階で、従来の講義形式によるガイダンスを継続していても今後参加者が画期的に増える可能性は少ないと判断した。そのため、平成28年度は講義形式からアクティブ・ラーニングを取り入れたワークショップ形式へ転換することとし、5月に「レポートの書き方ワークショップ」を、10月に「Before & Afterでわかるレポートの組み立て方ワークショップ（以下、「レポートの組み立て方ワークショップ」）を各2回実施した。呼称が煩雑になるため、本稿においてはアクティブ・ラーニングを取り入れたワークショップ形式のレポート作成支援ガイダンスの総称として、「レポート・ワークショップ」と呼ぶこととする。

なお、附属図書館では、平成27年度まで「学生生活の技法」という授業の中の1コマでワークショップ形式のガイダンスを実施していたため、レポート・ワークショップ企画の段階においては、「学生生活の技法」の内容を踏襲するイメージでスタートした。「学生生活の技法」は、平成28年度は開講されなかったため、平成27年度まで実施してきたノウハウを活かし、図書館ガイダンスの新たな企画としてリニューアルするという位置づけである。そのため、5月の「レポートの書き方ワークショップ」の内容は、ほぼ「学生生活の技法」と同じであったが、実施した結果好評であったことを踏まえ、10月の「レポートの組み立て方ワークショップ」は、準備時間をかけて内容を深めた。

2.2.1. 実施内容

実施内容について、10月に実施した「レポートの組み立て方ワークショップ」を報告する。

まず、講義を行い、その後、配布したレポートのチェックシートとBeforeレポート（A4・3ページ）のリーディングを10分各自行わせる。Beforeレポートは、あえて問題点のあるレポート例となっており、どこをどう修正した方が良いのかを考えさせるための資料である。リーディング後に、着席している机の前後4~5名程度でグループになり、各自リーディングで考えた問題点を出し合って、20分ディスカッションを行う。そして、ディスカッションの結果をグループごとに発表させ、Beforeをどのように修正すればよいか解説する。最後に問題点を修正し論理構成も整ったAfterレポートを配布して補足説明を行う。資料の作成や当日の司会進行は研究開発室教員が行い、情報リテラシー教育ワーキング委員が進

行を補佐した。

上記の内容でワークショップを実施することにより、以下の2点の効果があると考えた。まず、1点目として、Beforeレポートのリーディングにより、他人の書いたレポートを客観的に読み、陥りがちな問題点を指摘することで、自分がレポートを作成する時に俯瞰できる視点が身につくことである。2点目として、グループでディスカッションすることにより、自分では気づけなかった問題点を仲間の学生から指摘されたり、ディスカッションが関連して徐々に深まったりするため、講義を受講しているだけよりも能動的・対話的にレポート作成のテクニックについて学修が深まることである。

2.2.2. 実施結果

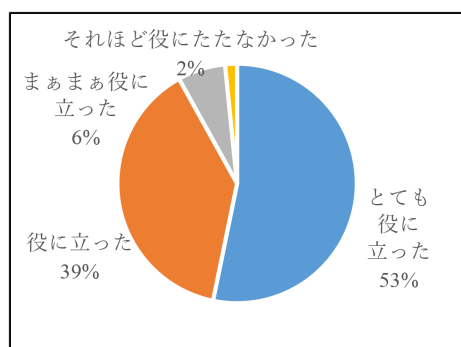
実施結果について、5月の「レポートの書き方ワークショップ」と10月の「レポートの組み立て方ワークショップ」を報告する。

実施日時及び参加人数は、以下のとおりであった。

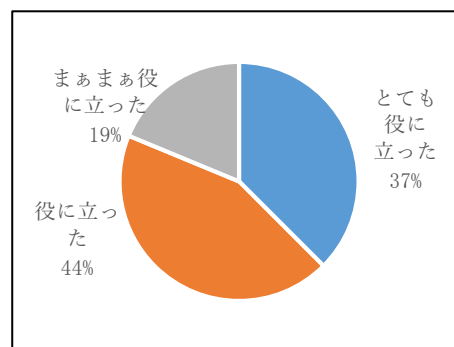
ガイダンス名	実施日時	参加人数
レポートの書き方ワークショップ	5月18日(水) 14:40-16:10	27
	5月20日(金) 14:40-16:10	43
レポートの組み立て方ワークショップ	10月12日(水) 12:55-14:25	11
	10月21日(金) 12:55-14:25	7

「レポートの書き方ワークショップ」では、合計70名が参加し、大変盛況だった。しかし、「レポートの組み立て方ワークショップ」では18名の参加に留まったことから、ワークショップ形式での実施に学生のニーズはあるが、年度開始時期に合わせて実施することがよりニーズに沿うことが明らかとなった。

【参加者の満足度】



「レポートの書き方ワークショップ」満足度



「レポートの組み立て方ワークショップ」満足度

【自由記述より抜粋】

- ・表紙の記載方法、構成の立て方、テーマの絞り方など、細かいところまで詳しくレポートの書き方を知ることができ、良かった。客観的にレポートを添削してみることで、注

意しなければならぬ点があった。

- ・ワークショップという形式が良かった。
- ・学生が不安に思っているテーマについて丁寧に説明されていて、とても良かった。もっと規模を大きくしても良いと思う。参加希望者が多いので、開催回数を増やしてほしい。
- ・見本があったので、レポートの基本的なルールやマナーが分かってよかった。
- ・書き方がとてもよく分かった。教員の説明がとても分かりやすく、スピード感もあった。来てよかったと思えた。



講義



ディスカッション



発表

参加者満足度からは、「レポートの書き方ワークショップ」「レポートの組み立て方ワークショップ」とともに、95%以上が「とても役に立った」「役に立った」「まあまあ役に立った」と回答しており、満足度は高かった。アンケートの自由記述にも記載されていたが、他人の書いたレポートを添削してみることで、より客観的な視点が得られ、自分がレポートを作成する際に注意すべき点が具体的に体得できたと思われる。

座学による講義受講型のレポート作成ガイダンスは、これまでも継続して実施してきたが、どうしても一方的な講義に終始するため、参加者にどれだけ効果が定着しているのか疑問の残る部分があった。今回、ワークショップ形式としたことにより、参加者が実際にレポートを添削し問題点を指摘し合ったことで、より能動的な学びとして、自分に引き付けて今後のレポート作成に取り組めるようになる場を提供できたと考える。

今回、新規にレポート・ワークショップを実施し好評という結果を得たことは、何がより学生のニーズに沿ったガイダンスなのかを考える契機となったと言える。今後、情報リテラシー教育活動としてガイダンスを企画する際には、学生がどのようなニーズを持っているのか、それに応えるためにどのようなガイダンスが考えられるのか、という基本に戻り、様々な可能性を模索したい。

3. 情報リテラシー教育活動のリデザイン：平成29年度の方向性

附属図書館では、従来、オンデマンド・ガイダンスという名称で、教員の要望に基づくガイダンスを実施してきた。これは、授業期間中に主にゼミ単位で申込を受け実施する形式であるが、教員の希望によって、授業の1コマで実施することもある。平成28年度の実施回数は、夏学期23回、冬学期11回（平成28年12月現在）である。附属図書館では、毎学期開始時期に合わせてオンデマンド・ガイダンスの案内を教員に配布しており、今までにオン

デマンド・ガイダンスを申し込んだことのある教員を中心に、毎年一定数の教員からは申込がある。ただし、学生側から見ると、教員が当ガイダンスを認識し申込を行ったゼミに所属していれば、受講の機会があるが、そうではない教員のゼミに所属する場合は受講の機会がないこととなる。特に、学部初年度においては、附属図書館の利用方法や資料の基礎的な検索方法を、所属ゼミに関わらず広く行き渡らせることが、学生が後々レポート執筆や論文執筆を行う際の底上げとなる。他大学の図書館でも、新入生の授業1コマにおいて図書館の基本的なガイダンスを原則として新入生全体を対象に実施している館はあり、入学してまず初めに図書館の使い方を全体的に周知することによって新入生のスタートラインを揃える、という考え方は、特別なものではない。

学部初年度に図書館ガイダンスを行き渡らせる方法については、授業を担当する教員との連携が不可欠である。特に、平成29年度は、新学期制が開始する初年度に当たるため、各学部においてカリキュラムの見直しも行われる。附属図書館では、こうした状況の中で、まずガイダンスに対する教員のニーズの把握を行い、その結果を踏まえて教員との連携を模索することとした。

なお、教員インタビュー実施の経緯としては、学内的な背景として、第3期中期計画にかかる平成28年度行動計画の中に、「学生の情報リテラシー能力向上および主体的学修を支援する講習会（中略）を実施するとともに、（中略）講習会等の在り方を検討する。」との文言があったことも大きな要素として挙げられる。平成28年度行動計画に基づき、「講習会等の在り方を検討する」に対応するインタビュー項目を設定し、教員のニーズを調査すると共に、新入生を対象としたより広汎なガイダンス実施の検討を趣旨として、教員インタビューを実施した。

3.1. 教員インタビューによるニーズ調査

3.1.1. 実施方法

教員のニーズ把握は、対象者に対するインタビュー方式によることとした。これは、図書館ガイダンスに対する意見は教員ごとにより異なると予想されたため、択一式のアンケート方式では教員のニーズを把握しきれないと判断したためである。また、対面でのインタビューを行うことにより、その場に応じて柔軟に話題を発展させることができるメリットがあると考えた。

対象者は、附属図書館委員会の委員より、各研究科・全学共通教育・経済研究所より1名ずつ選出し、計7名を対象とした。対象者を選定した後、インタビュー項目を記載した「インタビュー依頼書」（別紙1参照）及び、インタビューの趣旨をより詳細に説明した「参考資料」（別紙2参照）を対象者にメールで送付し、依頼と合わせて日程調整を行った。

インタビュー実施当日は、レファレンス系の職員を中心として、情報リテラシー教育ワーキング委員に協力を依頼し、2名1組でインタビュー実施と記録を行った。

実施期間は、平成28年7月～9月であった。

3.1.2. 設問内容

インタビュー項目は、以下のとおりである。

(1) ガイダンスの必要性

- ①情報や資料の探し方ガイダンス（講師：附属図書館職員）
- ②レポート作成・論文作成ガイダンス（講師：研究開発室教員）
- ③剽窃・研究倫理ガイダンス（講師：研究開発室教員）

(2) オンデマンド・ガイダンスの必要性

- ①授業の時間以外に実施する、スポット形式のガイダンス
- ②授業の時間内で実施する形式のガイダンス

(3) 導入科目的な授業の1コマを図書館ガイダンスで使用するについて

(4) 所属の学部で導入科目的な授業の1コマを図書館ガイダンスで使用する際の課題

(5) 今後、図書館に期待するガイダンス

3.1.3. 回答の概要

実施前に予想したことではあったが、対象者によって、回答の内容は様々であった。特定の項目に対して深い内容の回答が集中したという訳でもなく、対象者によっては、事前を送付した「インタビュー依頼書」と「参考資料」から、項目に拘ることなく全体的な意見を述べた者もいた。

附属図書館の実施するガイダンスについては、好意的に捉える意見が多く、中には必要性が高いと回答した教員もいた。授業との連動を高めたいと回答した教員や、各学部とうまく連携できると良いと回答した教員もおり、教員側からも附属図書館との連携を望む意見があったのが印象的だった。更に、大学全体として情報リテラシーを周知する体制が整っていない点が課題との指摘があった他、教員・学生間の個対個で教えるのではなく、統一的な教育が必要との回答もあり、大学として基礎的な学修スキル習得の機会をより広く提供することに対するニーズが窺えた。

一方で、学部によっては、平成29年度以降に新生を対象として実施する導入ゼミでレポートの書き方を必修化する学部もあり、附属図書館が実施するガイダンスは内容が重複するため、どのように取り入れられるかが課題である、との指摘もあった。

今後については、教授会を通してガイダンスを制度的に授業に組み込む方法、学部のカリキュラム委員に相談して導入科目である程度柔軟に実施する方法、現状通り個別に教員とコンタクトを取り個別に実施する方法がある、との指摘があり、学部との連携に向けて具体的な方策の提示があった。その他、オンデマンド・ガイダンスのコンテンツを、附属図書館のHPにアップし、教員が学生にURLをメールで案内できるようになるとよい、との意見もあった。教員側から具体案を示されたことは、附属図書館が今後のガイダンスの方針について検討する際の大きな手がかりとなった。

以上の他、インタビューで得られた全回答を館内で共有し、今後のガイダンスへどのように反映できるか検討して、平成29年度以降のガイダンスについて、方針を定めた。

3.1.4. 今後の方針

インタビューにおいて得られた回答を基に、附属図書館では以下について今後実施していくことを方針立てた。

まず、平成28年度中に、オンデマンド・ガイダンスのコンテンツをHPにアップすることについてWGや課内で調整し、平成29年度前半に実施を予定することである。そして、図書館ガイダンスの導入科目での実施について、平成28年度～29年度にかけて各学部の学士課程のカリキュラムを担当する教員と調整し、できるだけ効率的に導入科目で実施する方向で検討することである。

インタビューでは様々なリクエストがあったが、今後の方針を定める段階においては、まず実現可能性の高い事柄から着手することとした。教員や学生のニーズに沿ってガイダンスの枠組みを再構築することも重要である一方で、それを担う職員のスキルアップも大切であり、「なぜそのガイダンスが必要なのか」「実現へのロードマップの中で今ほどの段階なのか」「今後どのように進めるのか」といった認識を共有しつつ、他大学図書館の事例を調査したり、本学附属図書館での実施に落とし込むよう検討したり、と、情報リテラシー教育ワーキングを主な場として議論を深めることで、情報リテラシー教育に関する職員のレベルアップにつながると考える。

3.2. 平成29年度ガイダンスへの反映

3.2.1. 附属図書館ホームページへのガイダンス・コンテンツの掲載

オンデマンド・ガイダンスで作成し使用しているスライド資料について、毎年度末にPDF形式で附属図書館HPへ掲載することとした。掲載はその年度に使用しているガイダンス・コンテンツのみとし、前年度以前に使用していたガイダンス・コンテンツは情報が古くなっているものもあることから、掲載しないこととした。

3.2.2. 導入ゼミでの図書館ガイダンスの実施を検討

新入生に対する図書館ガイダンスの導入科目での実施については、教員インタビューを実施した結果、学部の導入科目で実施を検討するよう方針立てた。これに基づき、平成29年度に導入ゼミで図書館ガイダンスを試行できるよう、平成28年度冬学期に館内で検討を行い、学士課程カリキュラム担当の教員と調整した。

実施の検討に当たっては、附属図書館としても初めての試みであることと、平成29年度は新学期制の開始年度に当たることから、本学を構成する4学部全てではなく、まず一つの学部で試行し、その結果を検証して、平成30年度以降に他の3学部でも実施を検討することとした。

4. おわりに

本稿では、ゲーミフィケーションやアクティブ・ラーニングを取り入れたガイダンスの事

例として、平成28年度に新規に実施した企画である図書館脱出ゲームとレポート・ワークショップを報告した。また、情報リテラシー教育活動のリデザインとして、教員のニーズを把握するための教員インタビュー実施と、それを踏まえた、平成29年度以降の学部初年度における授業での図書館ガイダンス実施への取り組みについて報告した。これらの取り組みは、現在実施しているガイダンスを能動的なものへ転換すると共に、今後入学してくる新入生に対して学部初年度で広く情報リテラシースキルを習得させることにより、学部生全体に対して主体的な学びをサポートする体制を整えることを目的としている。

図書館脱出ゲームは、当館としては初めての実施となったゲーミフィケーションを取り入れたガイダンスであり、準備に労力を要しはしたが、参加学生は当初の予想以上に多く、好評という結果が得られた。今までガイダンスは講義形式が主であったが、今回新たにゲーミフィケーションをガイダンスに取り入れ、成功を取めたことで、必ずしも昔ながらのイメージに沿ったやり方だけではなく、時代に即した学生との向き合い方があるという、新しい可能性が示せたと思う。

レポート・ワークショップは、「学生生活の技法」において平成27年度まで実施してきたノウハウを活かし、図書館ガイダンスの新たな企画としてリニューアルし実施したものであったが、特に5月の回は会場が満員になる程参加者が多く、盛況であった。企画当初は、これ程盛況となるとは予想していなかったため、実施後は改めてガイダンスの在り方を考えさせられる、良い機会となった。ただ毎年実施しているから今年も、という漫然としたメニューではなく、どの時期にどのようなニーズがあるのかを踏まえた上でニーズの高いガイダンスに集中的に力を注ぐ、といった、めりはりの利いたメニューにする必要があると考える。

7月から9月にかけて実施した教員インタビューにおいては、附属図書館の事業として進めているガイダンスの在り方について、教員に意見を伺い、オンデマンド・ガイダンスのコンテンツをHPにアップすることと、図書館ガイダンスの導入科目での実施を検討するという、今後の二つの方向性を打ち出すことができた。そして、その方針に基づき、平成29年4月の導入ゼミで図書館ガイダンスを試行するよう教員と調整した結果、新入生を対象とした導入ゼミで図書館ガイダンスを実施するという、現在よりもより広汎に、かつ統一的に、新入生に対して情報リテラシースキルを身に付けさせる取り組みに乗り出すことができた。

本稿の報告は、平成29年度に予定されている本学のカリキュラム改正という学内的な背景を控え、当館で実施しているガイダンスを全体的に概観した結果、現在の学生にはどのようにしたら情報リテラシースキルを効果的に伝えられるかを改めて検討し、附属図書館で実施している情報リテラシー教育活動の枠組みをデザインし直す一歩を示したものと言えよう。

大学における「能動的な学び」を実現するために、大学図書館としてどのように学生に学びの場を提供し、学びをサポートするかは、大学図書館界全体の動向を踏まえたマクロな視野と、各大学における事情を踏まえたミクロな視野の双方を持ちながら進めなければ

ならない。また、ミクロな視野においては、大学の教育の中で附属図書館の提供するサービスをどのように位置づけ、大学全体の目標やビジョンに貢献していくのかという視点は欠かせない。学生の学びのサポートという点において、情報リテラシー教育は附属図書館が独立して実施するサービスであるのではなく、大学のカリキュラムの中で有機的に位置づけられるよう、より戦略的な視点でデザインすることが求められている。

今後は、他大学図書館の事例も参考にしながら、より洗練され、効果的で効率的な情報リテラシー教育の在り方を、学生のニーズと合わせて探っていきたいと思う。

¹ 科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会。“大学図書館の整備について（審議のまとめ）：変革する大学にあって求められる大学図書館増像”。文部科学省. 2010. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm, (参照 2016-12-21).

² “学長見解「一橋大学強化プラン(1)：3つの重点事項」”。蓼沼宏一. <http://www.hit-u.ac.jp/guide/message/150323.pdf>, (参照 2016-12-21).

³ 長谷川敦史。“大学図書館における「脱出ゲーム」とゲーミフィケーションの可能性”。ふみくら No.87. 2015-03-30. http://dSPACE.wul.waseda.ac.jp/dSPACE/bitstream/2065/44833/1/fumikura_87_hasegawa.pdf, (参照 2016-12-21).

⁴ 常磐大学。“Libardry（リバードリイ） 図書館ガイダンスをゲーム化しました。”。大学図書館における先進的な取組の実践例（Web版）。2016-09-01. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/03/1361417_01.pdf, (参照 2016-12-21).

⁵ “平井嘉一郎記念図書館企画「図書館大脱出ゲーム」開催のお知らせ”。立命館大学図書館. 2016-04-08. http://www.ritsumeit.ac.jp/library/news/article.html/?news_id=360, (参照 2016-12-21).

⁶ 一例として、以下を挙げる。

“封鎖されたミステリー図書館Ⅱ～夜の図書館からの脱出～”。練馬区立光が丘図書館. 2015-07-10. <https://www.lib.nerima.tokyo.jp/upload/topic/pdf/1436417990.pdf>, (参照 2016-12-21).

⁷ 一例として、以下を挙げる。

“ライティング支援連続セミナー2016 春期（2016年6月9日～6月16日）”。筑波大学附属図書館. http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/w5lib/?page_id=2820, (参照 2016-12-21).

[Report]

The Report of the Information Literacy Service on 2016 : Switching to Active Guidance Incorporating Gamification and Active Learning, and Redesign of Information Literacy Service

Sagisaka, Kayoko.

Reference Service Section, Academic Services Division, Department of Library Affairs, Hitotsubashi University

(別紙1)

情報リテラシー教育に関する教員インタビュー (依頼)

附属図書館

附属図書館では、従来から学生向け情報リテラシー教育の一環として様々なガイダンスを実施しています。第3期中期目標期間においては、「必要な情報を検索し活用することができる」という基本的な学修スキルを、できるだけ多くの学生に習得させるための取り組みについて検討しております。そこで図書館が実施するガイダンスについてのご意見をいただきたく、以下のインタビューにご協力をお願いいたします。

1. 図書館で実施するガイダンスのうち、以下の3種類のガイダンスについて、今後の必要性及び、必要の度合いをお聞かせください。

- 1) 附属図書館職員が講師となって実施する「情報や資料の探し方ガイダンス」

[]

- 2) 研究開発室教員が講師となって実施する「レポート作成・論文作成ガイダンス」

[]

- 3) 研究開発室教員が講師となって実施する「剽窃・研究倫理ガイダンス」

[]

2. 図書館では、附属図書館が提供する学術情報(各種資料、データベース等)の効果的な検索や、レポート・卒論執筆に関し、先生方のご要望(開催時間、場所、内容等)に沿って、授業やゼミ単位でのご参加を承る「オンデマンド・ガイダンス」を実施しています。「オンデマンド・ガイダンス」には以下の2つの形式がございますが、各々について今後の必要性及び、必要の度合いをお聞かせください。

- 1) 「個別タイプ」: 授業の時間以外に、附属図書館職員や研究開発室教員が講師となって実施。主にゼミ単位で申込む、スポット形式のガイダンス。

[]

- 2)「授業科目タイプ」: 授業の時間内で、附属図書館職員や研究開発室教員が講師となって実施。授業の1コマを使わせていただく形式のガイダンス。

3. 導入科目的な授業の1コマを図書館ガイダンスに使わせていただくことについて、ご意見をお聞かせください。

4. ご所属の学部で導入的な科目の1コマを使わせていただくとすると、どのような課題があるでしょうか?

5. 今後、図書館でどのようなガイダンスを実施するとよいか、ご意見をお聞かせください。

以上でインタビューは終了です。ご協力頂き、有難うございました。

-----<事務局記入欄>-----

インタビュー対象者	() 研究科
インタビュー実施者	
インタビュー実施日時	月 日 () : ~ :
インタビュー実施会場	

(別紙2)

平成28年3月1日

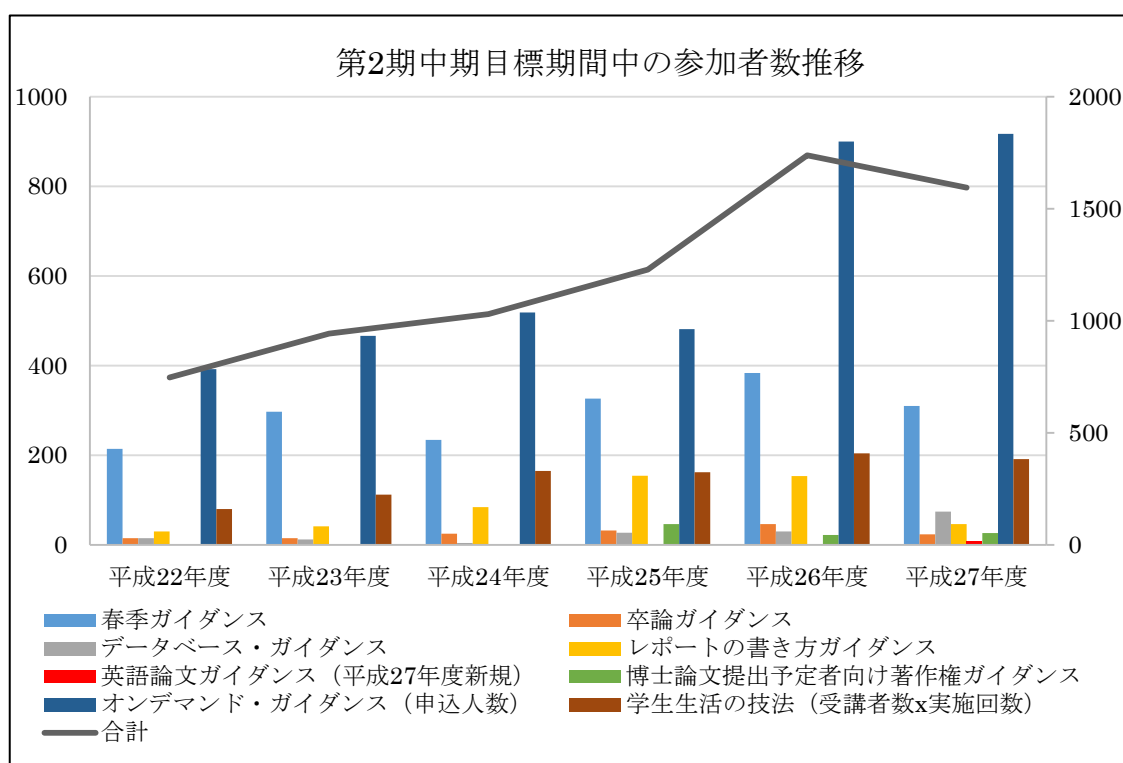
附属図書館

学期改革以降の情報リテラシー教育と学修環境の充実について

1. 附属図書館が実施する情報リテラシー教育支援について

本学附属図書館では、伝統的に中央図書館制度により研究資料を教員と学生共に利用できる研究・学修環境を提供し、学部の垣根を越えた学修意欲の高まりや学术交流の進展に貢献してきた。その歴史の中で、従来紙資料であった研究資料は1990年代頃より電子化されインターネット配信となり、研究や学習のスタイルはメディアの変遷とともに多様化している。

附属図書館ではインターネット時代への突入と共に多様化する資料への案内、効率的な文献検索方法、レポート論文の書き方、ネット時代の著作権や文献管理、引用等の技法について、新入生から大学院生までを対象とした情報リテラシー能力向上支援の講習会、ガイダンス等を実施してきた。また、本学附属図書館では、図書館職員と共に専門分野の助言のできる研究開発室教員（助教1名、専門助手3名）が情報リテラシー能力向上支援を企画・実施してきた特徴があり、さらに大学教育研究開発センターや APLAC との連携による講習会等を開催してきた。これらの連携体制により、第2期中期目標期間（H22～26年）には、講習会等参加者数は約750人から約1,700人に伸び、2.3倍となっている。（下図参照）



文部科学省による「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について」（審議のまとめ）（平成25年8月）においても、

「グローバルな環境に対応できる人材育成が急務であり、そのためには大学教育の質的転換が不可欠とされていることから、大学改革への期待とともに、その前提となる学生の学修環境の充実が求められている。」とされている。

ここでは、学修環境として「コンテンツ（蔵書、電子コンテンツ）」、「学習空間（ラーニングcommons等）」とともに「人的支援」の必要性が挙げられている。学生の学修活動を充実するための「人的支援」については、教育関連部署、図書館、教員の連携による支援体制の構築により、より充実した学修環境を提供することが求められている。

また一橋大学第3期中期目標中期計画においては、以下の項目を掲げている。

中期目標		中期計画	
1. 教育に関する目標		(2) 教育の実施体制等に関する目標	
3	学問への憧れと志を高め、学生の主体的学修活動を引き出すと同時に、提供する講義内容の国際標準化と教育スキルの向上を図る。	13	情報リテラシー能力を向上させ、学生の主体的学修活動を促進するため、附属図書館の開館時間を延長するとともに、情報検索・資料収集方法習得のための講習会や読書推進活動を行う。

この中期計画13を実践するために、今後の学期制改革に沿った支援が必要と考えている。

2. 平成29年度以降の学期制改革に向けての学修環境の充実

附属図書館で独自に開催し学生が自分のスケジュールに合わせて参加する集合型の講習会については、平成26年度がピークで27年度は若干の減少があった（前掲グラフ参照）。その要因の一つとして学生の多忙化等が推察されている。今後、平成29年度の学期制改革により任意参加型の講習会に参加するのは、学生にとってさらに難しくなることも予想される。

附属図書館では、平成21～27年度まで大学教育研究開発センターと連携し「学生生活の技法」において、図書館職員・研究開発室員が3～4コマを担当し文献検索方法の解説・実習及びレポート作成のグループワークを実施してきた。平成27年度の実績は、夏・冬学期合わせて8回実施、のべ191人が受講した。

今後は、この「学生生活の技法」のような導入教育科目の中に図書館が実施してきた情報リテラシー能力支援が含まれることが望ましく、このような基礎的な学修スキル習得の機会が全学生に行きわたることが望ましい。

また、附属図書館では、それに加えて今後予想される新たなニーズ（英文論文作成、著作権、研究倫理、文献管理等）に対応し、学部学生、大学院生の学修・研究支援を行い、授業に密着した文献収集および提供について積極的な支援を行うことを今後の重点項目に掲げている。